



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

**バハレーン：英国海軍の恒久基地受け入れを決定**

12月5日、バハレーンと英国は、バハレーンのサルマーン港に恒久の英国海軍基地を新たに設置することで合意した。BBCによると、基地建設に必要な費用は1500万ユーロ（約2300万ドル）と見積もられており、バハレーン政府が費用の大半を負担すると見られる。

これまで英国海軍は掃海艇4隻をペルシャ湾内に恒常的に展開していたが、バハレーン国軍や米第5艦隊の基地を間借りしていた。ファロン英国防相は、「この新たな基地は、英国海軍の恒久的な拡大であり、英国が湾岸地域の安定を強化するためにより多くの、そしてより大きな艦船を展開することを可能にするものである。我々は再び長期間湾岸に基地を保有することになった」と述べた。また、ハモンド英外相は、今回の合意に関し、「湾岸地域のパートナーと共有された戦略的・地域的脅威への対処に関する協力の進展の一例に過ぎない」とし、二国間関係の強化は基地の建設にとどまらないことを示唆した。

今回の合意は、マナーマ・ダイアログに出席中のハモンド英外相とハーリド外相との間で、サルマーン皇太子、ファロン英国防相同席の下、MOU（了解覚書）の形で締結された。バハレーンでは5日から7日の日程で英国のシンクタンクである国際戦略研究所（IISS）主催のマナーマ・ダイアログが開催されており、多数の閣僚、政府高官がバハレーンを訪問していた。

評価

英国が中東に恒久基地を設置するのは、1971年のスエズ以東撤退以来、約40年ぶりのことである。英国では近年、中東地域での軍事プレゼンスを高める動きが強まっていた。2013年4月に英国王立安全保障研究所（RUSI）は「A Return to East of Suez?」と題するペーパーを公開しており、ここ数年の英国と湾岸諸国との軍事協力関係の深化を指摘した上で、訓練施設や装備品の保管庫などを湾岸に設置しておくことを提言していた。ここでは、米軍が中東地域から手を引きつつあるなか、「力の空白」の発生を防ぐため、湾岸の基地を通じて英国軍の海外展開を容易にするとともに、湾岸諸国との連帯を強化することが重要であるとされていた。今回の恒久基地建設の合意は、それらの動きの一つが実現したものと言えよう。

バハレーン側としては、英国との軍事関係が拡大することは、自国の安全保障にとって歓迎すべきことである。特に2011年以降、米国との関係がぎくしゃくするなか（例えばマリノウスキー米国務次官補の国外退去問題など。詳細は[「バハレーン：ウィファーク幹部と会談した米国務次官補を国外退去に」『中東かわら版』No.84（2014年7月10日）](#)を参照）、米国以外の国との協力を拡大することは、バハレーンの戦略的地位を安定させよう。しかしながら、12月4日にマリノウスキーの再訪が実現したように、米・バハレーン関係は深刻なレベルで悪化しているわけではなく、米第5艦隊の駐留など主要な軍事分野での協力は今後も継続していくと見られる。

他方、バハレーン・英国関係の強化がこの時期に公表されたことは、バハレーンの国内情勢への影響の観点からも興味深い。ハモンド外相はマナーマ・ダイアログでの演説において、

「バハレーンで第4期議会選挙が実施されたことを祝福するとともに、新たな議会と政府の成功を祈る」と述べた。さらに、BBCとのインタビューでは、「ウィファークなどが選挙をボイコットしたのは残念だが、40議席中14議席をシーア派が獲得し、うち3議席が女性だった。これは正しい方向への進展だ」と評価した（選挙の詳細に関しては「[バハレーン：議会選挙の実施（最終結果）](#)」『[中東かわら版](#)』No.196（2014年12月3日）を参照）。これは、英国がバハレーンの現在の政治情勢、そして人権状況を肯定したのと同義である。すなわち、英国はバハレーン政府との軍事関係を強化するにあたり、国内情勢に関して政府寄りの立場をとることを示したのである。この背景には、政府との対話で妥協を全く示さないウィファークの姿勢に欧米側も苛立ちを募らせているという事情があるものの、「国民対話」の進展を求める反政府派にとって大きな打撃であろう。バハレーンでの活動を禁止されている人権団体の中にはロンドンに拠点を置いている団体も少なくないが、活動の継続自体に大きな影響はないとしても、これまでのような支援を英国政府から得ることは難しくなる可能性がある。

（村上研究員）

---

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799